

「エネルギー・インフラめいしん」

10月号「今月の焦点」

15 月号はつか、由

題は、あまかせしむ。

No. 1

「第二回石油危機以降毎年減りつづけてきた
わが国のエネルギー需要も、一昨年から増勢
に転じ、昨~~回~~五^五年度も二、八%の増加を示し
た。しかし通産省の分析によると、このやや
たそめの増加率~~は~~^はいふ^ふつかの特殊要因で説明
できかねる。今体的には、長期エネルギー
見通しをえらぶほど遠隔する心配はさく、一六
石油をめぐる国際情勢も~~不~~^需給緩和、価格低迷
という基調に変化なく、当面わが国としては

エネルギーの供給安定とコストの最適¹バラン
 スをとりながら、石油の安定確保、原子力と
 どの代替エネルギーの開き導入、省エネの推
 進をはかるという、従来の基本方針を堅持す
 れば足りる」と結論づけられている。
 ところで問題は、このようなエネルギー需
 給の将来に、果たして不連続線は現れるか
 という点である。その不連続線は、というや
 うに、二〇〇〇年を転機として一着に表面化
 しようかと思われる。
 最近関係者限りという

ことば配布された国際エネルギー機関（IEA）
 の試算によると、先進国の石油消費が全く増
 加せず（途上国）の消費もゆるやかに回復す
 ると見られる。二〇〇〇年ころにはOPECは
 生産能力一杯の生産を強いられる。石油の
 足は決定的に不足する。また、供給は不
 安定で、石油の大量燃焼による大気中の二
 酸化炭素の増加は五〇％増に達し、地球
 規模の気候変動の生ずる見可能になろうとい
 うのか、止むを得ない。

そのころには日本は~~世界~~世界を済の六ヶの一を

担う存在となつてあり、求めうる国際責任

も極めてきついものとなりつてい~~る~~が~~ある~~。

二〇〇〇年までの残された十五年の間に日本は

~~最~~適バランスを目標とく求めつづける

エネルギー政策において~~は~~かけでよいものか。

次の石油危機も日本は~~その~~郵政と経済力に物言。

ゆせうまく果りやれば、それによいという

こと~~は~~であらうか。

日本にはエネルギーの分野は~~軽~~軽小水力分野

みこし

よいな相あるい水陸の交通があらう

世界通を接するほどの巨大な経済力

がある。ここの力軍に自らの利益を

~~いかに~~

十五年後の世界の混乱

を救う一助となるように作られるべき工

をいかに利便というものではなろうか。

いまの国際的な交通網の様々といふと